

ながのけん 埋蔵文化財センター速報

平成13年10月23日 発行

発掘前線 通過中

記録的な猛暑がまるでうそのように、この頃はすっかり朝晩が寒いくらいに感じます。

透き通るような空の青、モザイク模様のような山々の色づき。季節はいつのまにか秋本番となりました。

屋外での作業が続く発掘調査にはとても過ごしやすい季節です。今年度の当センターの調査も、4月開始から半年が経ち、今がまさに“発掘本番”となりました。



現在 調査・整理の行なわれている遺跡

新たな発見 飯田市の竹佐中原遺跡では、後期旧石器時代を遡る可能性のある石器群が見つかりました。最近の旧石器時代の遺跡調査の問題を踏まえながら、慎重な調査が進められています。これまでに2ヶ所の石器集中が見つかり、現在、範囲の確定や時代の特定といった、遺跡の性格を見極める調査が行なわれています。 **《特報へ》**

更埴市の八幡遺跡群、社宮司遺跡ではこれまで出土例のない木製の仏塔「六角木幢(ろっかくもくどう)」が見つかりました。また30棟をこえる建物群や緑釉手付瓶が埋納された土坑、奈良三彩の小形壺、墨書土器、木簡など、貴重な発見が相次いでいます。今後の竪穴住居などの調査によって、その集落の構成や性格が注目されます。 **《特報へ》**

調査開始 9月から信濃町吹野原A遺跡、箕輪町箕輪遺跡の調査を開始しました。吹野原A遺跡では石器100点程が出土しています。また大町市の肩平・まねき遺跡では10月から試掘調査を行ないます。

遺跡名	所在地	主な時代	状況
1. 吹野原A遺跡	信濃町古間	旧石器	9月開始
2. 仲町遺跡	信濃町野尻	旧石器～中近世	本調査
3. 八幡遺跡群	更埴市八幡	古墳～平安時代	本調査
4. 上五明条里水田址	坂城町上五明水田址	平安～近世	報告書作成
5. 山の神遺跡ほか	大町市常盤	縄文時代早期	報告書作成
6. 肩平・まねき遺跡	大町市常盤		試掘調査
7. 聖石遺跡	茅野市北山	縄文時代中期	報告書作成
長峯遺跡	"	"	報告書作成
8. 笹原上遺跡	茅野市豊平	縄文時代	報告書作成
9. 馬捨場遺跡	茅野市泉野	旧石器～縄文時代	報告書作成
10. 箕輪遺跡	箕輪町三日町	弥生中期～中近世	9月開始
11. 丸山遺跡	飯島町本郷	縄文時代中期	8月終了
12. 竹佐中原遺跡	飯田市山本	旧石器	本調査
13. 川路大明神原遺跡	飯田市川路	縄文時代中期	本調査

遺跡ニュース

特集

あな・アナ・穴

穴を考える

あな【穴】くぼんだ所。(広辞苑)
表面が低く、また奥深くくぼんだ所。(国語大辞典)

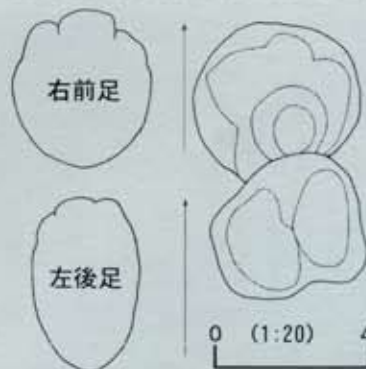
私たちが調査している遺跡からは、たくさんの“あな”が見つかります。大きさもさまざま、形もいろいろ。人がほったり、自然にできたり…、あなができた原因も多様です。

埋蔵文化財の調査は過去の人間の生活・行動の痕跡である遺跡を調査することを目的としています。

ですから本来は人間の残した“あな”を調査するわけですが、関連する環境(自然がつくった“あな”など)を把握することによって、より当時の人間の生活ぶりを理解できる場合もあります。

ここでは、最近、各地の遺跡で見つかった「あな」を取り上げてみました。いろいろな穴から過去の世界を覗いてみましょう。

穴1 ナウマンゾウの足跡化石 信濃町仲町遺跡から



現在のアジアゾウの足跡(左)と仲町遺跡の足跡化石(右)
※茶臼山動物園 インディ(メス・推定23歳)

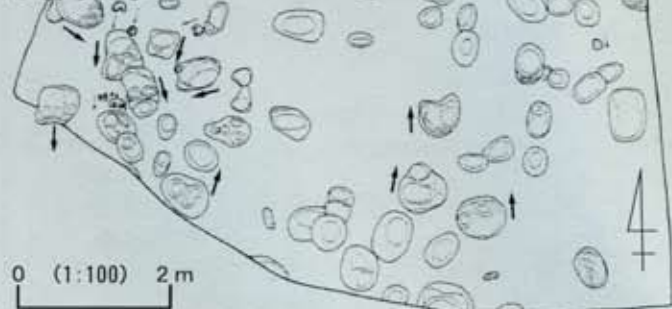
野尻湖の東にある仲町丘陵の、池尻川に向かう斜面を調査している仲町遺跡から、大きさ40～50センチほどの円形や楕円形をした穴がい

くつも見つかりました。穴は150個ほどあって、重なり合っている部分もあります。穴の形状や分布の状況から、1990年に野尻湖畔の立ヶ鼻遺跡で見つかった4.3万年前のナウマンゾウの足跡化石と同様であることが分かりました。

仲町遺跡の足跡化石が残された層も約4万年前後に堆積した中部野尻ローム層に含まれます。残りの良い穴には、ゾウの指の跡まで残っています(上図参照)。またオオツノジカなどの大型の偶蹄類の足跡も見つかっています。

足跡化石は好条件が揃わないと、なかなか見つけることができません。今回の場合、適度な水分を含んだ、粘り気があるきめの細かい土の上をナウマンゾウが歩いて、その足跡(くぼみ)が崩れる前に、全く性質の違う赤っぽいザラザラした土が穴の中や、周辺の地形を覆うことによって、まるで足跡がバックされた状態になったと考えられます。そして何万年もの間、安定した状況が続いた結果、調査によって化石として発見されたのです。

当時、池尻川はまだ野尻湖の一部で、いまよりずっと水域を広くしていたのでしょ。そんな湖畔沿いをゾウやシカは何を求めて歩いていたのでしょか。



仲町遺跡の足跡化石(↑は歩いた方向を示す)

吹野原A
馬捨場

竹佐中原 仲町

山の神

丸山・大明神原
聖石・長峯

箕輪

レキシものさし

旧石器時代

縄文時代

1万年前

5,000年前

穴2 穴の中に、また穴がある。

飯田市川路大明神原遺跡から

飯田市の川路大明神原遺跡から円形の穴の底に、更に横穴状の穴がある、「2段掘り土坑(通称)」が見つかりました。

この遺跡は縄文時代中期を中心とした集落遺跡です。穴(土坑ともいう)は約830個も見つかりました。その種類は大体3種類に分けられます。

1. 直径1~1.5m前後の円形タイプで、底が平ら、壁は垂直であったり、袋状になっていたりする。貯蔵穴と考えられる。
2. 楕円形で壁から底の形状がU字状のタイプ。
3. 楕円形や長方形をして底面に小ピットを持つことがある、陥し穴と考えられるタイプ。

「2段掘り土坑」の上部は、1タイプの大形土坑と同じ形状をしていて、その仲間と考えられます。

土坑の分布をみると、住居跡がある集落域のある台地から少し離れた別の台地の平坦面に1、2タイプの土坑が集中する範囲があり、そのなかに「2段掘り土坑」も多く含まれます(下図)。

SK1279号土坑(上図)の断面を見ると、数ヶ所ある横穴には、別の横穴が埋まった後に、もう一回掘り直している部分もあるようです。

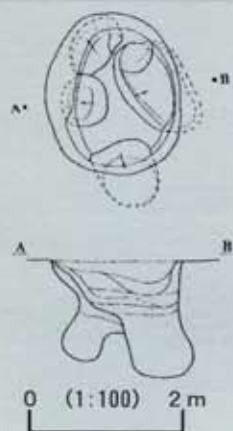
これらの土坑の時期は出土遺物や土の様子から、住居跡や1タイプの円形土坑と同じ縄文時代中期と考えられます。

同じような土坑は、縄文時代前期末の茅野市大六殿遺跡、北山菖蒲沢A遺跡、また中期初頭の茅野市馬捨場遺跡から見つかっています。

円形土坑は貯蔵を目的とする穴と考えられています。この「2段掘り土坑」の用途も同じなのかどうか。今後の課題です。



集落と土坑の分布範囲(略図)



2段掘り土坑(SK1279)

穴3 ヒスイの入る穴

茅野市聖石遺跡の整理作業から

過去の人たちは、なぜ穴を掘ったのでしょうか。それを考えるヒントの1つに、「遺物」があります。

八ヶ岳の麓にある、茅野市聖石遺跡は縄文時代中期の大きな集落遺跡です。現在は報告書作成のため、遺構や遺物の整理作業を行なっています。

まさに今、2000個を超える穴とにらめっこをしています。調査資料を広げて、「穴の掘られた目的」を知ろうとしますが、なかなか笑ってくれません。

そんななか、聖石遺跡には「ヒスイ製垂飾り」という遺物が出土した3つの穴があります。どの穴も東西に長い隅丸長方形で、長さ約1m。ヒスイは底付近の東の片隅から見つかりました。ヒスイのある穴の底には黒褐色の細かな土があって、その上を黄色いロームのブロック土が厚く覆っています。

この状況を、当時の人々がわざわざ穴の中にヒスイを納めて埋めた結果と理解しています。では1mほどの大きな穴を掘る意味はなんなのでしょうか。

縄文時代後期前葉、遠く北海道礼文島にある舟泊遺跡では、屈葬位の埋葬人骨とともに、その胸元から聖石遺跡と同じ形状のヒスイ製垂飾りが出土した墓坑(お墓)が見つかりました。ヒスイの産地は新潟県糸魚川周辺といわれています。

聖石遺跡のヒスイの入る穴も、人骨こそ残っていませんが、同じようなお墓ではないかと考えています。

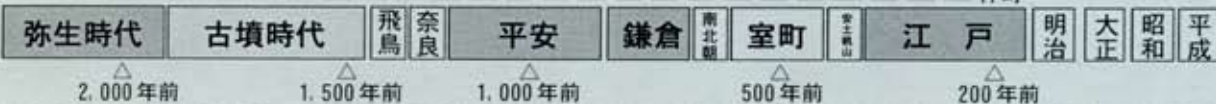
遺物を通じて、他の遺跡との比較検討することも、当時を知る大事な鍵になります。



環状に分布する土坑群と、ヒスイの入る土坑

社宮司

箕輪
仲町



穴4 穴のを見つけ方と掘り方

更埴市八幡遺跡群社宮司遺跡から

これまで紹介した穴は、すべて土の中に埋まっています。遺跡もまた、土の中に埋もれています。

では、どうやって穴を調査するでしょう。現在調査中の更埴市八幡遺跡群の社宮司遺跡での調査例から、その方法を探ってみましょう。

社宮司遺跡は8～10世紀の集落遺跡で、竪穴住居跡や溝跡、掘立柱建物跡、そして多くの土坑(穴)が見つかっています。

ふつう陸上で見つかる遺跡では、そこに堆積している土の層(土層)は、人為的な理由(たとえば穴を掘るとか)によって下部の土が掘り返されて逆転していたり、断層・土石流のような自然の営力によって、本来の堆積した順序が乱れていない場合には、下部に堆積した土層の方が上部に存在する土層よりも古いという時間的な前後関係を示しています。

写真1 そこでまず、土層を観察して、遺跡の埋没過程や文化層(遺物包含層)、穴などの遺構が見つかる面(検出面)を確認します。検出面では、丁寧に作業を進めて、遺構の痕跡を土の色の变化で探します。

写真2 丸い土色の違う範囲が見つかりました。土の色や状況に気を付けて、まず半分だけ掘り進めます。残される土の壁(土層断面)は、これが本当に穴かどうか、穴であれば、どのような状態で埋まっていったのかを教えてください。

写真3 土層断面の観察、図化、写真などの記録が済むと、出土遺物に注意して、掘り進めます。

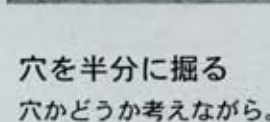
写真4 この状態で、上から見た図や写真などの記録を取ります。穴の大きさ・深さ・遺跡での位置などの情報を細かく記録します。

写真5 慎重に掘り出された遺物は、登録・洗浄をされて、より詳細な図化や写真撮影といった室内での作業を経て、保管されます。

以上のような手順で穴は調査されます。このような作業が、くる日もくる日も繰り返されているのです。そしてこの地道な作業によって、はじめて「穴」は「埋蔵文化財」となって、将来に記録保存されていくのです。



遺構の検出作業
土色の变化に注意します。



穴を半分掘る
穴かどうか考えながら。



遺物を残して掘る
遺物を壊さないように…



穴を記録する
メジャーを使って正確に
図面に記録します。



遺物の記録をとる
きれいに洗って、
ハイ、チーズ。



SK500に埋納されていた
緑釉手付瓶と土師器

野 椏 調査現場につきものの「あな」。この穴はなんだろう。どうしてここに穴があるのだろう。見学会にいらした時は、是非穴を覗いてみてください。過去の人たちの暮らしぶりが見えるかもしれません。

今回、アジアゾウの足跡の計測では、長野市茶白山動物園の須田さん、田村さん、アロー君、インディちゃんに大変ご協力いただきました。ありがとうございました。(R)



長野県埋蔵文化財センター速報 平成13年第2号

平成13年10月23日

(財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒387-0007 更埴市屋代字清水260-6
Tel 026-274-3891
Fax 026-274-3892

特報その巻

社宮司遺跡出土の六角木幢、それから

今年6月、更埴市八幡遺跡群の社宮司遺跡より、国内初の木幢（もくどう）が出土しました。すでに報道発表などされていますが、ここにあらためて報告したいと思います。



六角木幢の宝珠・請花と笠部

六角木幢

この塔は六角塔婆（ろっかくとうば）とも呼ばれ、仏塔の一種と考えられる。信仰の対象・供養塔・道標などの目的で建てられ、つくられた時代によって形や用いられ方が違う。現在、残っているものは、全て石造品であり、そのため石幢（せきどう）と呼ばれ、時代的には鎌倉・室町時代の遺品と考えられている。

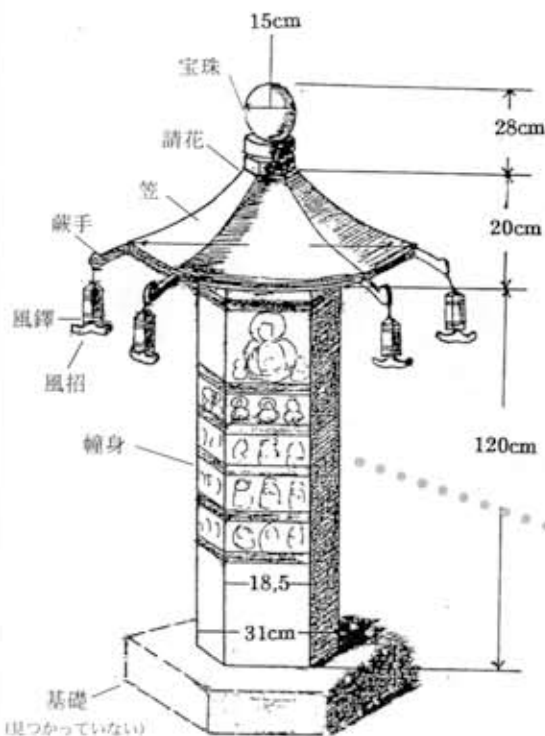
鎌倉時代以前には、石造品ではない、木造品があったことが古い文献や絵画資料にうかがえるが、これまでに実物は残っていない。

木幢の見つかった状況 遺跡の最南端に近い、現在の宮川寄りの微高地部にある、東西南北に走る幅2mほどの溝跡の合流地点から見つかった。合流地点は幅10m程に広がる沼のような状況を示していて、そこに投げ込まれた石積の上面から出土している。そこに、幢身（どうしん）、笠（かさ）、請花（うけばな）、宝珠（ほうじゅ）、蕨手（わらびて）、風招（ふうしょう）、風鐸（ふうたく）、などといった各部品がまとまって残されていた。

木幢としての認識 水洗作業によって六角柱状の幢身、笠の形状が明らかとなった。そして笠の中心に宝珠部がぴたりと組み合わさった時、蕨手、風招、風鐸の存在も納得できた。

仏画の発見 全体像から木製の塔と判断された後、幢身部表面の観察によって、そこに仏画が存在することが明らかになった。顔料などはほとんど残っていない状態であったが、斜めに当てたライトによって、大小の仏像画が照らし出された。この阿弥陀如来像と考えられる仏画によって、仏教関連の木造塔との観方がいっそう強まった。その後、関連資料の検索、見識者の

指導や教示によって、現在のような「六角木幢」という解釈に至っている。



社宮司遺跡の木幢復元予想図



仏画のスケッチ

社宮司遺跡

長野県更埴市八幡字社宮司に所在する。八幡遺跡群のひとつ。更埴市の南西、冠着山（姨捨山）や三峰山といった山々の麓にひろがる、佐野川によって形成された扇状地の起伏地に立地する。古代の集落遺跡はおおむね微高地部に存在する。

社宮司遺跡では1975年に更埴市教育委員会によって調査が行なわれている。掘立柱建物跡9棟、溝跡6本を確認し、竪穴住居跡を含まない特殊な集落構成と、県内では出土例の少ない奈良三彩陶器が出土したことなどから、その特異性が注目された。

センターでは、国道18号線坂城・更埴バイパス建設に伴う調査として、本年度より本調査を開始した。範囲は9,000㎡で、更埴市の調査地の西側に隣接している。10月現在、概数として竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡40軒、土坑80基、溝跡80、木棺墓1基が見つかった。

集落の時期は出土遺物から奈良時代終わりから平安時代中ごろと考えられる。

木幢の時期

社宮司遺跡の村の存続時期からすれば、木幢の年代も平安時代中ごろに遡る可能性がある。

空也上人（903～972年）の記録中に木幢に類する路傍の塔が記されていることを、東洋大学の石井義長氏に教えていただいた。この記録は、まさに社宮司遺跡の年代に符合している。

今後、理化学的分析として木材の年代測定を実施し、遺物年代を補強したい。

発見の意義

- ① 笠塔婆は木製品については現存例がない。従って今回の出土例が国内唯一の木製笠塔婆ということになる。
- ② 基礎の部分を除く、すべての部位が残っていて、造立時の状態が復元できる。
- ③ 餓鬼草紙など、平安末期に成立した絵巻物に描かれる木幢の存在が実物で証明できる。

最近の調査

今月、木幢の発見地点近くから、人骨を伴う木棺墓が1基見つかった。周囲には、ほかに墓はなく特異な状況である。この木棺墓と木幢の関連性はまだ分からないが、現在も調査中であり、今後も新たな貴重な発見が予想される。



社宮司遺跡全体図（9月現在）



国宝「餓鬼草紙」（京都国立博物館蔵）に描かれた木幢

…阿彌陀三尊像を彩色美しく描いた塔婆が立っている。柱には供花が見える。餓鬼の場面である。人々が住く水の傍らに三匹の餓鬼が忍び寄って、水をベチャベチャなめている。…（日本の絵巻7 中央公論社より）

餓鬼草紙 絵巻物。12世紀後半の制作。平安末期に流布した輪廻思想に基づく六道絵の一部と考えられる。（平安時代史事典 角川書店より）

特報その式

竹佐中原遺跡発見の意義

今年7月27日、飯田市竹佐中原遺跡からいわゆる前・中期旧石器時代に遡りうる可能性が高い石器群が発見されました。これまでの調査の経過と意義をまとめてみました。

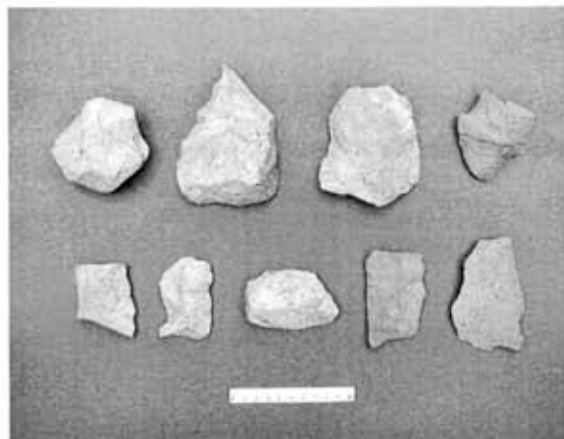


写真1 第2ブロックの石器

竹佐中原遺跡の位置

遺跡は飯田市南西部、山本地籍に位置します。西方には標高1397mの高鳥屋山があり、遺跡はその山麓部に発達した扇状地にあたります。遺跡のある小丘陵はこの地域で一番古く形成された扇状地で、その後の侵食により東西に長い馬の背状の台地になっています。

竹佐中原遺跡の北西400mには旧石器時代の遺跡として有名な石子原遺跡があります。石子原遺跡の台地とは、開析する谷を隔てて近接しています。

これまでの調査 今回の調査は三遠南信自動車道とそのアクセス道路建設に伴う事前調査です。遺跡はインターチェンジ予定地であるため、対象面積も広大で、昨年までに試掘および一部本調査が行われ、縄文時代以降の竪穴住居跡や土坑を確認していました。本年度は7月4日より試掘調査に入り、平安時代の竪穴住居跡1軒と土坑数基を確認しました。

石器群の発見

7月27日ついに待望の旧石器が発見されました。竹佐中原遺跡の北西400mには、29年前中央自動車道建設に伴って発掘調査をして、旧石器が出土したことで有名な石子原遺跡があります。「移動生活をしてきた旧石器人が残した遺跡は石子原遺跡1ヶ所だけではないはずだ。必ず近くに旧石器の遺跡が発見されるはずだ。」調査に携わったメンバーの合言葉のようでした。そのような

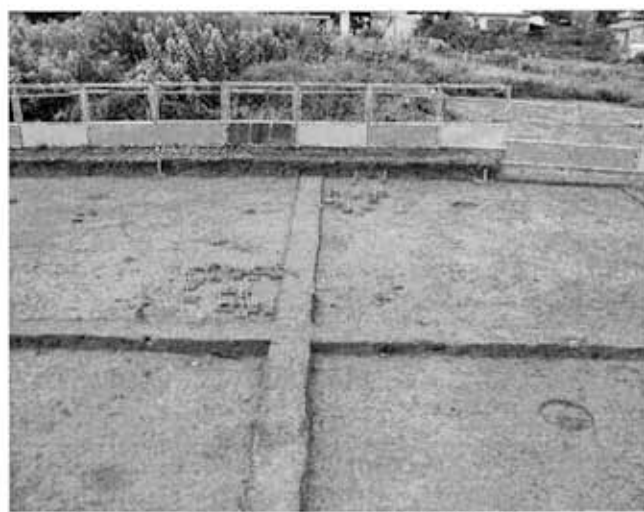


写真2 石器出土状況

右奥が第1ブロック、左手前が第2ブロック。
両ブロックとも径約3~4m

中で竹佐中原遺跡での旧石器発見は、「やっと出た。」「やっぱりあった。」という感動がありました。

石器の出土層位 遺跡の表土の厚さは20~30cm。石器は、その表土直下の暗黄褐色ローム層中から出土します。石器は約25cmほどの高低差をもって出土しています。本遺跡の土層は、隣接する石子原遺跡のものと基本的には同様ですが、石子原遺跡より安定しており、石器の出土層準は正確に捉えられる可能性があります。

出土した石器群 石器の出土点数は、10月15日現在70点を数えます。

それらの分布は、8×8mの範囲内に2ヶ所の遺物集中が確認されています(写真2)。

石器の様相 竹佐中原遺跡出土石器は、大形で厚手の剥片石器を特徴とした石器群であるといえます（写真1）。

出土した石器は全体的に大きく、剥離は粗く、剥片の形も精緻ではないという特徴があります。さらに剥片に顕著な二次加工を施し、石器の形状を整える石器ではないということは、剥片に精緻な二次加工を施し石器を製作する後期旧石器時代の一般的な石器製作技術とは大きく違うように思われます。また、石器に使用されている石材は、石材の名称は現在検討中ですが、遺跡下の礫層もしくは近傍では採取できない石材であり、他の場所からもたらされたものと考えられます。

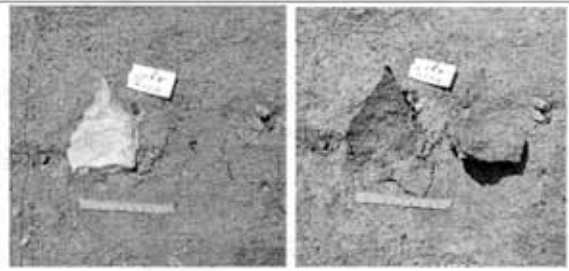


写真 3

写真 4

写真3は石器の出土状況です。写真4はその石器を取上げた後に土に残った石器の跡（左）とその石器の裏側（右）です。何万年にもわたって地中に埋もれていた石器の跡がしっかりと大地に刻まれています。

石器の評価

竹佐中原遺跡から出土した石器の評価は、現段階で以下の4点にまとめられます。

- ① 石器は、ローム層中から発掘されており、この石器群が縄文時代以前、つまり旧石器時代の所産であることは、ほぼ間違いのないといえるでしょう。
- ② 石器出土地点およびその周辺からの土器等の出土がないことは、他の時代の遺物が混在していないということになり、一時期の純粋な石器群であるという評価ができます。
- ③ 石器の特徴からは、現在までに発見されている後期旧石器時代ナイフ形石器文化以降の石器群とは違う点が指摘されます。
- ④ 以上のことから、竹佐中原遺跡の石器は、後期旧石器時代ナイフ形石器文化以前の所産である可能性が極めて高いといえ、いわゆる「前・中期旧石器時代」に遡りうる可能性が高いということがいえます。



写真5 石器取り上げに熱中する文化庁岡村調査官（中央）と戸沢充則明大教授（右）

竹佐中原遺跡発見の意義

昨年11月に「前・中期旧石器ねつ造事件」が発覚しました。この事件は旧石器時代の研究だけでなく考古学研究そのものが大丈夫なのかという社会から厳しい批判を受けることになりました。竹佐中原遺跡の発掘調査は、事件発覚後はじめてその疑惑の時期に該当するような石器の発掘調査となりました。そのような状況から、いち早く遺跡を公開し、一般の方、研究者を問わず、より多くの方々に生の発掘調査現場をみていただき、理解していただくことが大切であると判断しました。そしてその成果は今確実にあがっています。

竹佐中原遺跡の年代や石器の最終的な評価はまだ今後のことになると思われますが、再構築をせまられる旧石器研究の中で、この遺跡が再構築のひとつの素材になるとすれば、明るい話題であるといえるでしょう。



写真6 旧石器調査風景

地表からわずかに30～40cm。あまり深くないところから石器は出土しています。